

【公成の体験から】

3月11日。僕はあんな日が来るなんて信じられなかった。今でも。

あの日、先輩方の卒業式でした。午前で学校が終わった僕は、佑と駿紀と拓海と遊ぶ約束をし、家に招きました。住み始めて4ヶ月くらいの新築の家で、来たがっている友だちもたくさんいました。あの4ヶ月間は父と母と3人で幸せな時間でした。

「おじゃまします」

と声が聞こえ、3人の友だちが入ってきました。その日の卒業式の話をしたり、とても盛り上がっていました。

午後の2時半くらいになって駿紀が、

「お菓子買いに行こう」

と言うので、近くの立石商店へ歩いて行きました。

そして、店へ足を踏み入れた途端、ガ

タガタガタッと大きな揺れが起こりました。立っていられなくなり、慌てて道路の真ん中でしゃがんでいました。しかし、揺れが収まらず、雪が吹雪く中を大急ぎで走り家へ戻りました。

「危ないから外で待ってて」

と佑たちに言って一人で家の中に入りました。すると何から何まで物が落ち、とても片付けられる状態ではありませんでした。2人で出かけていた両親に連絡だけでもとろうと思いましたが、電話はつながらず身動きがとれませんでした。

その後、佑たちと高さ3～4メートルの高台へ上り避難しました。数分してから、駿紀の母親が迎えに来て、駿紀と拓海は帰っていきました。

2人が帰ってから佑が、

「俺も自転車で帰るから」
と言い出しました。僕は、

「ダメだ。帰ってる途中に何かあったら
どうするんだ」

と呼び止めました。

僕と佑は薄着だったので高台を下り、家からタオルを持ってきました。高台へ避難してくる人たちも多く、高台の下で何分か誘導をしてから佑にタオルを渡しに行きました。親切な男の人が「寒いから」と言って高台に置いてあった車の中へ入れてくれました。車の中に10分くらいいましたが、その時車の外に母の姿が見えました。僕のことを心配してくれた両親は出かけた先の石巻から野蒜まで戻ってきてくれたそうです。

しかし、喜びもつかの間。海岸の方から少しずつ波が見えてきました。その時は（まさかここまでは来ないだろう）と思っていました。次の瞬間、目の前に波が押し寄せてきました。

「えっ」

とにかくあの時は頭が真っ白というより
真っ暗になりました。

「走れ！」

僕たちは津波から逃げるように走りまし
た。運よく小屋のようなところがあり、
僕と母は間一髪そこに逃げ込みました。
だけど佑は波に流されてしまいました。
僕たちの小屋のそばを、

「助けてー、助け…」

と叫びながら流れていく人たちもたくさ
んいました。水かさが増していく小屋の
中で僕は母に聞きました。

「そう言えば親父ってお母さんと出かけ
てたんだよね？」

すると母は、

「お父さんは公成が家の中にいるか確認
しに家へ入ったの」

と暗い声で言いました。それを聞いた僕

は言葉を失いました。

どんどん増していく水かさは僕たちの首までにたっし、小屋から屋根によじ登ろうとしました。最初に僕から上がり始めましたが、濡れた服がとても重く、寒さで手にも力が入りませんでした。僕の体はぶら下がった状態になりました。そして、次の瞬間手が離れてしまいました。その時は（死んだ）と思いました。でも自分の生きたいという気持ちの方が津波の力に勝りました。腕が伸び、足が何とかつき、九死に一生を得ました。どんどん波が引いていきました。

「助かった」

何度も何度もその言葉が口からこぼれました。

でも油断できなかった。僕たちは少し高い山へ身を寄せ合いました。山の上から流された佑の名前を呼ぶと、

「助けてー」

と叫ぶ声が聞こえました。

「生きてた」

そうつぶやいた僕は何だか気持ちが悪くなりました。あの時「帰るな」と言わなかったらどうなっていたことかと思いました。

その山の陰になっていた一軒の無事だった家にひと晩いさせてもらうことにしました。津波から2時間くらいが経って、流された佐がそこへ来て合流することができました。夜もずっと津波が来るんじゃないかと警戒し、しきりに確認しました。夜中、外に出ると、空一面に星が広がっていました。きれいな星というよりも、不気味な感じがしてとても怖かったです。その夜はとにかく大切な仲間たちが大丈夫であることをただひたすら祈り続けました。

次の朝、僕たちは大人の人に、

「近くに生きている人がいるから手伝ってくれ」

と頼まれ、そこへ行きました。そこにあったのは僕の父親の車でした。(もしかしたら)と僕は思いました。しかし、中には別な人が乗っていました。残念な気持ちになりましたが、とにかくその人たちを助けようと思いました。(父の物が人を救ったんだ)と前向きに考えるようにしました。

その後、浅井の公民館に向かいました。炊き出しで出されていたおにぎりを食べて元気が出ました。ここでは平山先生ら3人の先生方や前日に一緒にいた駿紀や拓海、卒業式の謝恩会から戻ってきた一紀先輩といったたくさんの人たちに会いました。震災の夜を一緒に過ごした佑も家族と再会し嬉しそうでした。佑とはこ

こで別れました。

そうしているうちに父の実家の秋保からおじいさんとおばあさんが迎えに来てくれました。「父はもしかしてだめだったかもしれない」と話すと、おじいさんたちは悲しそうでした。

秋保に行く前に、僕たちは中下の定林寺に向かいました。(もしかしたら父が避難しているかもしれない) そう思ったからです。でもそこには父はいませんでした。だけど学校に部活の練習で残っていたバスケット部をはじめ、二中の人と会うことができました。みんなに「またね」と声をかけ、秋保へ出発しました。こんな時だからこそ友だちと一緒にいたかったです。

(2012. 1. 20.)